

光陰似箭

哈爾浜から満洲里

(中国研究所) 杉山 文彦

7月23日から31日まで中国の黒竜江省から内蒙古自治区を回ってきた。これはH大学のMゼミの卒業生を中心にした「龍の会」が企画した旅行に参加したもので、今回はハルビン、ハイラル、ノモンハン、満洲里と回り、一度ハルビンへ戻り、それからチャムスまで往復してハルビンより帰国という日程であった。

M教授の定年退官は1979年だったはずだから、「龍の会」のメンバーは最も若くても還暦過ぎ、多くは大企業の管理職を退職した人たちである。実際今回の旅行参加者の内、現役はC大学のO教授と弁護士のY氏のみ、他の6名はみなリタイア組、それに団長U氏の中国における親友であるJ氏とD氏が現地で加わった。日本人参加者の平均年齢は70か71といったところ、気楽な観光旅行かと思いきや、このメンバーは福州に行けば嚴復の墓に詣で、広州に行けば黄埔軍官学校や農民運動講習所の跡地を訪ね、旅順では旅順監獄も見に行くといった具合で、過去数年にわたり日中の近代史に正面から向き合う中国旅行を繰り返している。同会の中国旅行は、すでに十回前後行われているようだが私が参加したのは、2014年、15年に次いで今回が3度目である。

7月23日、羽田から上海へ飛び、上海から大連へ、ここでU氏が自分の義弟と称するJ氏が合流、7時頃ハルビン着。上海は40度くらいはありそうな暑さであったが、ハルビンはさすがに涼しい。着陸前、夕陽に照らされた松花江が見えたが大きく蛇行しまるで自然そのままの川のようにであった。周辺は一面の緑、トウモロコシであろうか。所々に小さな集落が見え夕陽に木々が長い影を曳いていて、まことに雄大な風景であった。

7月24日、ハルビンの夏季の夜明けは早い、4時にはすっかり明るくなる。9時半にバスで市内観光へ出発。旧大和ホテル、セントソフィア教会、キタイスカヤ通りを歩き松花江へ至る。セントソフィア教会の建物は1986年まではハルビン第一百貨店の倉庫として使われていたそうで、現在は博物館のようになっており、内装の剝がれ落ちた壁にハルビンの歴史を示す写真などが展示してあった。極東で最も大きいロシア正教の建物だそうだが、次々に立つ高層ビルの中に埋没しつつある。中も外の広場も行楽客で賑わっているが、宗教性は全く感じられない。市内にはロシア支配時代の建物がかなり残っている様であるが、バスで通った限りでは普通の雑然とした中国の地方都市になってしまったという感じである。

キタイスカヤ通りの、現在の正式呼称は何と言うのか聞くのを忘れた。訳せば中国路となってしまうが、はたしてどうか。一直線の通りは全体が歩行者天国となっており、もう少し人通りが少なければ落ち着いた散策路であろう。両側の名も知らぬ街路樹が良く枝を張っていた。キタイスカヤ通りの尽きる所が松花江の堤防であった。広場の真ん中に大きな治水工事記念の銅像が立っている。上流の方で大雨が降ったとかで松花江は茶色く濁っていた。数百メートル向こうに見えるのは、対岸ではなく中洲とのこと。

午後5時48分、ハルビン西駅からハイラルへ向け夜行列車に乗る。硬臥車（二等寝台）、私は三段ベッドの下段であった。車窓からは一面のトウモロコシ畑が続く。よく見ると、その中に棄てられたような集落が見える。J氏の話では、近年この辺一帯では海南島へ移住する者が多く、向こうでは黒竜江省出身者のコミュニティができてしまっているとのこと。「しかし、海南島へ行って仕事はどうするんですか」「さあ、何をやっているんでしょうかねー」

7月25日、朝4時頃目が覚めると、列車はまだ

らかな丘の続く中を走っていた。興安嶺はもう過ぎたらしい。通過する駅の漢字表記の上にモンゴル文字が加わっているの、内蒙古自治区に入っていると分かる。5時40分、ハイラル着、聞いていた到着時間より1時間くらい早い。これでは乗客が困るだろうと思ったが、ハルビンから合流したD氏によれば、中国の列車は遅れるだけでなく、早く着いたり早く出たりすることもあるとのこと。

ホテルで朝食後、車でノモンハンへ向かう。約3時間、その間の風景は緩やかに起伏する草原、何種類かの黄色の花が草原の一角を染めている。そこに牛、馬、羊の群れ、小さな家、ゲル、所々に松林、遠目には夢のような景色だが、かつてこの辺りを日本軍が行軍した。草原の中にモンゴル人の移動式天幕ゲルが十軒くらい集まり周囲に色とりどりの明るい旗を立てた場所がある。恐らく観光客目当てのテント村であろう。近くに馬が群れている。

ノモンハンの戦場であったとされる場所は、草原の中にゲートがあって小さな管理事務所と売店があり、そこから延びる道の先1キロ余り行ったところに大きな博物館の建物が立っているのが見える。そこまで歩いて行っていたら、4輪の自転車に乗った若者が「あっちに行っても何にも無いよ」とすれ違いざまに知らせてくれた。博物館は改修中で入れない。裏へ回ってしばらく行くと沼地が広がっていた。その向こう辺りがモンゴルとの国境のはずだが、それらしいものは見えなかった。あちこちに牛がたむろしている。こんな所で戦争をするとは、国家とは困ったものだ。

7月26日、車で3時間かけて満洲里へ行く。初めは曇天であったがやがて強い雨となった。しかし満洲里へ着くころには晴れた。車窓からの景色は昨日同様、一幅の絵である。

ハイラルから付いた案内人は母がモンゴル族という若い女性、母方の祖母が存命中はモンゴル語を話すこともあったが今はそれはない、彼女自身

は漢族の暮らしの方が好きだとのこと。以前私が砂漠の緑化活動で行っていたクブチ砂漠の近くでは、家畜のほとんどがカシミヤ山羊だったがと言うと、山羊は草の根まで食べて草原を荒らすので、この地方ではあまり飼わない、この辺りでも砂漠化の危険がないわけではないとのことであった。草原の中、所々に最近作られたと思われる住宅団地のようなものが出現する。ことによると近年進められている牧民の定住化策の住居かもしれぬ。

満洲里は内陸最大の貿易都市。派手な色合いのビルが立ち並んでいかにも新開地といった感じ。中心街の直線道路の両側には土産物屋がずらりと並びマトリョーシカその他、様々なものを売っているが、あまり客は入っていない。やはりロシア人をよく見かける。

7月27日、昨日、満洲里から硬臥車に乗り、朝ハルビン駅に着く。駅改装工事のため伊藤博文暗殺の場所は見られなかった。工事中ということもあって駅周辺は大変な混雑。ハルビンは路上駐車が非常に多く、一車線は駐車場になってしまっている。安重根烈士記念館、革命烈士記念館、黒竜江省博物館と見学する。前二者は写真に説明を加えたものが主たる展示物、日本が悪役になるのは致し方あるまい。博物館の展示物はやはり辺境の感あり。最後のロシアが入ってきた時代の展示のし方は意外に親ロシア的か。

キタイスカヤ通りの書店で本を2冊買って現金を出したら一寸迷惑そうな顔をされた。周りを見るとみなスマホで決済をしていた。

7月28日、車でチャムスへ向かう。周囲の風景はトウモロコシ、時に大豆、ジャガイモも混じる。山地にはマツ、カラマツ、ポプラが目立つ。木の大きさからしてここ数十年の植林の結果であろう。方正県に近づくにしたがい水田が多くなった。

方正県は第二次大戦末期、ソ連軍に追われた日本人入植者が多数命を落としたところで、残留孤児も多かった所である。幹線道路から外れて水田

の中をしばらく行くと大きな林の中に日本人公墓はあった。日頃は非公開のようで鉄柵状の門を開けてもらって入ると、大きな円盤状の合葬墓があり、周囲は林でひっそりしている。林を挟んで東隣には日本人残留孤児養父母の公墓。さらに1980年代齢70を過ぎてからこの地に来て寒冷地稲作の指導をして稲作を飛躍的に発展させた藤原長作の記念碑、この地における近代の日中関係を中心に展示した記念館もあった。墓守を兼ねた農民が住んでいて、園内はよく手入れされて花が美しかった。夕方、チャムス着。

7月29日、チャムスは清末の三江省の省都であった所だが、今回まわった都市の中では最も落ち着いた感じがした。今日は先ず長谷川テル・劉仁夫妻の墓を革命烈士公陵に詣で、皆で献花をする。

もう40年近く前になるが、夫妻の遺児と日本の親族との連絡役をしたことがあった。エスペランチストで日中戦争中に中国へ渡り反戦活動をした長谷川テルは、中国にとっては日中友好を象徴させるに好都合な人物であろう。夫妻の墓は烈士公陵ができた時ここに移されたそうであるが、陵園中では最大級の造であった。

松花江の畔の公園を散策し、満洲国時代の警察署跡地等をめぐる。警察署跡地の建物はすっかりさび付いた感じで今はほぼ廃墟か。今日案内に立ったY氏は、市の外事署の元職員、残留孤児のこと、日本軍の残した化学兵器のこと、松花江沿いに漁労で暮らしていたホジェン族のこと等様々に語ってくれた。車でハルビンへ。

7月30日、団長のU氏が昔ハルビンの銀行駐在員であった時、関心を持った岸与五郎という人物の処刑地へ行ってみるということで阿城へ向かう。岸与五郎は満洲国時代の阿城の副市長、戦後処刑されたという（岸与五郎が中国研究所の長老所員岸陽子氏の父君であったことは後で知った）。訪ねて行ってみると、そこは半ば打ち捨てられた

様な工場地帯の一角で廃墟同然。結局、処刑地は定かには分らなかった。ただ、それと思しきところをJ氏がスマホで検索していると、そこはポーランド出身のユダヤ人が1902年に建てた製糖工場の跡地で、当時建てられた社宅が何棟か残っていると出てきた。今も人が住んでおり、中を見てゆけというので入ってみる。二階建てレンガ造りの住居は広い間隔を取って並んでおり、さすがに百年以上たつてすっかり荒れ果てているが、当時は相当な高級住宅であったことがうかがえる。市の保存建築物に指定されていた。

それにしても、スマホ一つでハルビン近郊の廃墟同然の施設の由来が分かってしまうのであるから、中国のインターネット事情には正直驚かされた。その後、阿城の金代博物館、そこには完顔氏の子孫の画家の展覧館もあった。それから完顔阿骨打の墓。

午後は、731部隊の記念館を見学。記念館は近年全面的に建て替えられた様で、以前に見た同行者によると、以前のものは蠟人形による展示が多く感情に訴える面が強かったとのことであるが、今回見る限り展示は優れて学術的と言えよう。各種の実験器具、研究員の英文による報告論文、日本人関係者の証言のビデオなどが、広い記念館の中に数多く展示してあり、正直なところ多すぎてとても見ていられない。高校生か大学生らしき若者が多数来ていたが、あまり深刻なものを見ていないという感じではなかった。

ただ、戦後アメリカとの取引で責任追及を免れた関係者が、戦後の日本で大学や医療機関のエリートとして活動し続けたことを示す最後の展示には、考えさせられた。

7月31日、4時に起こされて空港へ向かう。上海までは順調。ところが羽田行きに乗り換えてみると同行者3名がいない。空港で一杯やっていて乗り遅れたとのこと。